

## 報告 2

# 日本におけるニュージーランド研究と 早稲田大学

\* 総合司会：

それでは第2報告を開始したいと思います。慶應義塾大学名誉教授小松隆二先生によります、「日本におけるニュージーランド研究と早稲田大学」です。よろしくお願いいたします。

小 松 隆 二

(慶應義塾大学名誉教授／白梅学園大学理事長)

### 序

どうもお待たせいたしました。ご紹介いただきました小松でございます。皆様、そろそろお疲れになる頃ではないかと思えます。これまでケネディ大使、そして植村先生の大変勉強になる話をいただきました。私も30年ほど前、クライストチャーチに住んでおりました、画像にも出てきたレッドクリフスに住んでおりました。同地の小学校の上にあたる丘で、海を見下ろす大変きれいな住宅街でした。リトルトンの港もすぐ近くで、よく立ち寄ったところです。

友人たちも今回の地震ではいろいろと被害を受けております。今改めて生々しい画像を拝見し、同時にすばらしい復興計画も伺いましたので、複雑な気持ちにもなっております。多分、クライストチャーチが復興して、夢のような街になる頃には私はもうこの世にいないんじゃないかなというような気持ちもあるからです。

さて、今日の私のテーマは、「日本におけるニュージーランド研究と早稲田大学」ということになっています。大体、早稲田大学に関係のないものが早稲田大学に出かけて早稲田大学の話をするというのは、よほど図々しいか身のほど知らずかで、大変恐れ多いことと思っております。それに、今日は、話の流れで、早稲田大学の創立者の大隈重信先生や慶應大学の創立者福沢諭吉も出てきます。このお二人についてはあまりにも距離がある歴史上の大人物ですので敬称は略させていただきます。お許しいただきたく存じます。

壇上からこう見まわしてみますと、ライトの関係でどなたの顔も全然見えないんです。真っ暗ですから、どこに目を向けていいかわからない状況で話をさせていただきます。

### 1

早稲田大学は、ニュージーランド研究を含めまして、アジア研究、アフリカ研究などでは至る所で大変大きな足跡を記し、先導的な役割を演じてきました。経済的に先進的な欧米諸国の研究はどこでも取り組むわけですが、そういうものに取り組むだけではなくて、むしろ後発の地域や国々に取り組むということは、流行とか主流、あるいは中央や表面といった部分にのみ目を向けるのではなく、光の当たらない部分とか、隅にある部分にもしっかり目を向けるということです。同時に、それは批判や挑戦の精神をしっかりと

り持っているということでもあります。まさに早稲田らしいあり方ではないかと思っております。

特にアジア研究では、早稲田からはこの会館にゆかりの小野梓先生とか、石橋湛山元首相とか、忘れられない人たちもたくさん出ております。私が特に印象深く思い出すのは学生の動向です。私が大学に入った五十数年前、アジア学会という組織が早稲田大学にできました。今もあると思います。学会を名乗るんですが、学生の団体です。まさに戦後の学生によるアジア研究をリードした団体です。初代の会長が松田壽男先生という中央アジア、内陸アジア研究の専門家ですから、活動を見ていると内陸アジア、中央アジアの研究が目立ったという印象を受けておりました。

私はその松田壽男先生の講演を聴いたことがあります。今も憶えているのは、まだ戦後まもなく、日本が財政的には厳しく、一般の学生や社会人はもちろん外国には行けません、学者でも一般より機会があったものの、簡単には行けない。ドルが簡単に買えない。そういった時に松田先生は、当時、若手でも中央アジア研究のホープでしたが、中央アジア、内陸アジアに一度も訪ねたことがない。しかし、その地に行っている人、行ける人に負けない工夫をして研究するんだということを胸をはって言われたんです。そこだけ大変印象深く頭に残っております。

そんなことで、私にとっては早稲田大学の地域研究というとアジア研究がすぐに思い出されます。よくあの頃から、学生までがアジアに目を向けることができたものと感心しておりました。早稲田の人も多分そう所持していないんじゃないかと思うんですが、『早稲田大学アジア学会20年のあゆみ』があります。学生がつくった20年史で、結構厚いしっかりしたものです。こういう活動を早稲田大学は担ってきたわけですが、私はそれを自分の目と耳で見聞してきました。そういう先生方や学生諸君がおられた早稲田大学の挑戦的な姿勢に大変刺激を受け、敬意を抱いてもきました。

ニュージーランド研究においても、大学別で考えますと、早稲田大学の関わり・役割を抜きにしては日本における研究は語れません。その点で、早稲田とよいライバルである慶應義塾大学の役割と並んでいると思います。ニュージーランド研究を振り返ると、肝心なところ、大事なところで顔を出すのが早稲田の関係者と慶應の関係者です。そういう意味ではニュージーランド研究の担い手としては早慶が双璧であったというふうに考えております。

実際にニュージーランドを日本に最初に紹介したのは誰なのか。ついでニュージーランドらしい特徴、全体像を最初に紹介したのは誰なのか。さらには、ニュージーランドについて初めて独自の研究らしいものを生み出したのは誰なのかと、考えてみますと、この3つの段階では、いずれも早稲田と慶應の関係者が顔を出します。

そういった中で、ニュージーランドを名前だけでなく、ちょっぴり事実や特色をつけて日本に最初に紹介したのは福沢諭吉でした。大隈重信についても後で触れますが、ニュージーランドに間接的に関わり、ニュージーランドを日本に知らせる、あるいは日本とニュージーランドの関係を深める一端を担っております。

次に、最初にニュージーランドをこんな国だ、こんなすばらしい国だという内容を示して紹介したのは、早稲田大学の安部磯雄でした。同じ頃、ニュージーランドの先駆性を紹介したのは当時のベストセラー『新社会』を書いた慶應の矢野龍溪（文雄）でした。この二人の共著『社会講演』（労働新聞社）が1901年に出ています。早慶の二人の先生が書いたこの本がニュージーランドを理想国として紹介した最初とってよいものでした。

さらに、ニュージーランドを客観的な研究対象として受けとめ、翻訳を越える独自の研究書にまとめた最初の人、土屋元作です。早稲田大学の前身、東京専門学校で学んだ人です。ただし、この土屋元作と

いう人は慶應にも深い関わりをもち、早慶両方に足場を置いた人でした。

このように、ざっと見ても早稲田大学関係者のニュージーランド研究、あるいはニュージーランドとの交流における貢献は、大変大きいということがわかりいただけるかと思います。

## 2

それでは、以上の概説をもう少し詳しく紹介させていただきたいと思います。

早稲田大学関係者のみではなく、日本の研究者の中でニュージーランドの理解や研究に入口を開いたのは、安部磯雄でした。日本を代表するキリスト教社会主義者であり、あるいは早稲田大学では野球部の恩人でもあった偉大な人です。そういう安部のような大物がニュージーランド研究、あるいはニュージーランドを見る理解の入口を開いたというのは、大変すばらしいことではないかと思います。

明治維新の頃、世界地図を見ても、失礼なことにニュージーランドを落として世界地図もありました。明治初期の頃は、その程度の理解や受け止め方で、ニュージーランドがオーストラリアのちょっと右の下にあるという程度の紹介しかなされないう。中身はほとんど触れられることはないという段階です。そういった中で福沢諭吉が有名な『西洋事情 外編』でニュージーランドにちょっぴり、土人、つまりマオリがいたという程度の説明を加えました。

そういう紹介的な段階を越えて、ニュージーランドはこんな国ですよ。しかも、理想郷、夢のような国ですよと最初に紹介したのが安部磯雄だったわけです。当時、日本のインテリゲンチヤたちが、憧れを抱いた国が2つありました。1つはスイス、もう1つはニュージーランドでした。ニュージーランドをそのような面から最初に紹介したのが早稲田の安部磯雄であったということです。

たまたま私は安部磯雄を昔から知っていました。というのは、どういう人かはよくわからないけれども、高校時代、早稲田の近くに住んでおりましたので、週末になるとこの辺にもやってきて、安部球場を覗くことがありました。球場には、安部磯雄を讃える銅像もちゃんとありました。そのグラウンドで早稲田大学の野球部が練習や試合をやる。あの頃は後に大洋ホエールズの監督にもなった森茂雄監督が指揮を執っていた頃でした。そんなことで、早稲田に関係がないのに安部球場を通して安部磯雄の名をよく頭に刻んでおりました。

安部磯雄がそのようにニュージーランドを最初に取り上げたのは、世紀の転換直前でした。1899年頃からニュージーランドに触れ出して、ニュージーランドに対して理想国という視点を打ち出したのは1901年でした。安部は早稲田大学にちょうど1900年に入ると思いますが、たまたまその頃、日本では社会主義が単なる理念、観念の段階から運動に移りかける頃でした。社会主義研究会が社会主義協会に変わり、さらに日本で最初の、わずか2日ほどであれ、存在した社会主義政党、社会民主党が1901年に結成されます。そのいずれにも安部は関係しています。

社会民主党というと、幸徳秋水や片山潜らが有名ですが、安部も6人の創立者の一人でした。そういうことで、彼は早稲田の教授になる頃から、日本の社会主義、とくに社会主義の理想を追求面に魅かれて、どんどん理念、ついで運動にも進んでいく。その彼の考える社会主義の理想がニュージーランドではすでに実現されている、そういう理解でニュージーランドを受けとめ、ニュージーランドを紹介したのです。

それがニュージーランドについて特色を受けとめて紹介した最初で、その後、戦前戦後を通じて、さらには今日まで、ニュージーランドは南の理想郷、南の理想国という認識が途絶えることなく続くこととなります。その源流が安部磯雄であったわけです。安部磯雄という人は、ニュージーランド認識をみても、社会主義への挑戦・傾倒を見ても、あるいは野球部の創設や野球部をアメリカ遠征に連れていったことを

見ても、既存のあり方、枠を越えて新しいもの、より良いものを追求しようとした人であったことがうかがえます。

### 3

さて、話は最初に戻るような形になりますが、早慶の創立者、大隈重信と福沢諭吉はニュージーランドにその理解や研究では初期の頃関わります、福澤は、前述のように名称や位置の説明を越えるニュージーランドの最初の紹介者でした。大隈重信はどのような形で関わったかといいますと、白瀬矗の南極探検との関わりからです。戦後の南極探検船に「しらせ」という船がありました。その名前は南極探検を日本人として最初に決行した白瀬矗に由来します。その時、白瀬を全面的に応援したのが大隈でした。

白瀬は秋田の金浦（現・にかほ市）の出身ですが、子供の頃から冒険、探検が好きでした。最初、彼は北極点を極めたいという夢を抱きます。そのため軍隊にも入り、訓練を積みます。ところが、そうこうするうちに北極はノルウェーのアムンゼンらに調査、確認で先行されてしまう。そこで、それならと南極の極点に目標を変えて挑戦することにしました。

その夢を具体化するときに引っ張り出されたのが大隈重信でした。朝日新聞社が後援していろいろ協力しますが、応援、寄付などがそれほど集まらない。そんなときに、表面にたってくれたのが大隈でした。もっとも、その名声をもってしても、お金は十分には集まらない。あと足りない分は白瀬個人の借入金でまかなわざるを得ませんでした。

かくして、204トンの小型船を調達して、着るものはじめ、用具・機械・設備類も南極で耐えられるのか心配になるほどの装備で果敢に立ち向かいます。

同じ頃、ノルウェーとイギリスは国を挙げて、国策として南極の極点への到達を目指していました。イギリスはスコット隊長、ノルウェーはアムンゼン隊長で挑戦しています。そこに、朝日新聞と大隈重信の応援を得たとはいえ、小型船で弱体な装備・設備で、白瀬個人がオーナーに近い形で果敢に挑戦をしたわけです。

その途次に寄ったのがニュージーランドでした。最終的な状況判断や食料等の調達でウェリントンに寄港しました。それが白瀬とニュージーランドの結びつきでした。そこを最後の拠点に、白瀬隊は南極に向かいました。

結局はノルウェー隊、ついでイギリス隊に先を越されますが、それでも白瀬隊は南極大陸に上陸、極点に向かって挑戦しました。そのことは戦前それほど評価されたとはいえませんが、戦後再評価されます。戦前は、白瀬は帰国しても借金だらけです。彼は講演や出版を続けて返済に努めますが、とても追いつかない。結局、親戚や知人に借金を残し、迷惑をかけたまま力尽き、生涯を終えます。

しかし、戦後になって再評価されて、郷里秋田のまち、皆さんも知ってる芭蕉で有名な象潟の隣の金浦といいますが、そこには白瀬南極探検隊記念館という立派な博物館が建っています。山形での研究会の折に、ここにおられる日本ニュージーランド学会の皆さんを案内したこともあります。

その南極探検隊記念館は、今はウェリントンの博物館と国際協力を結んでおります。お蔭で白瀬は、郷里でも借金を返せない無責任な男としてではなくて、英雄にかかわっています。まちには南極探検のまちという幟が沿道に翻っています。まちをあげて南極探検に挑戦している印象を与えるほど、白瀬と南極探検を前面に押し出しています。彼を記念する碑も立派なものが建っています。東京でも見直されて、芝浦の方の出航したところに銅像が建ったし、政府も南極探検隊船に「しらせ」という名前をつけて再評価するほどになりました。

白瀬勲がニュージーランドに立ち寄り、そして今ニュージーランドからも理解を得て、ウェリントンの港には白瀬を讃える両国交流の記念碑が建っております。ぜひニュージーランドに行かれる方は訪ねていただきたいと思いますが、その白瀬の探検の背後にいたのが大隈重信でした、大隈の応援無しには、白瀬がニュージーランドに立ち寄ることも、知られることもありませんでした。その結果、大隈は、白瀬を応援することで間接的に日本とニュージーランドとのつながりに貢献することにもなったということであります。

#### 4

以上のようなニュージーランド研究の入口の段階から、日本でもニュージーランド研究がいよいよ客観的な、科学的なレベルに進んでいくときがやってきます。それが明治の末から大正にかけてです。

明治、そして大正期にも、ニュージーランドに関する本は結構出ているのですが、ほとんどが翻訳か翻案のものでした。それに対して、日本人として初めてオリジナルなものが、すべてにオリジナルとはいきませんが、登場します。そのレベルのものを最初に出したのが早稲田大学に学んだ土屋元作でした。『濠洲及新西蘭』で刊行は1916年、大正5年でした。彼の勤務していた朝日新聞社から出します。もっとも、彼はこれを機に朝日新聞社を辞めることになります。

ともかく、いよいよ日本でもニュージーランド研究が本格化する。その先頭を切ったのが土屋でした。この土屋は、東京専門学校で学びますが、卒業はしていません。早稲田での講義など、思い出も書いてあります。坪内逍遙、市島春城、高田早苗とか、いろいろの先生のこと、かなり厳しい批判も含めつつ、書いています。

この土屋は大分県日出（ひじ）町の出身です。大分という土地は土屋の目を通してみると、オリジナルとか創造性、発明、発見に関わる人を多く出している。そういった人を彼は心から尊敬していました。例えば三浦梅園、前野良沢、帆足万里、あるいは福沢諭吉などです。前述の安部磯雄と同時期に理想国を訴えた矢野龍溪も大分の出身です。

大分の人というのは他人の真似ではなくて、自分自身で道を拓くということに強い関心を持ち、大切にします。それを土屋は大変強く受けとめていて、活字でも訴えています。自分自身も、例えば新聞人で、日本の新聞界を拓いた人とか、そういう類の著作を好んで書いております。

彼は日本に余り知られていない国の紹介もよくやっていますが、大正に入ると、ニュージーランド・オーストラリアに興味を持つ。ただ彼の場合、自分がニュージーランドを書くには、借り物では駄目で、現地に行って自分の目・耳・頭で確認したことを書くという姿勢になる。当時は、時間とお金がなくてはいけません。とてもニュージーランドとオーストラリアには行けません。にもかかわらず、彼は両国に出かける決意をする。単なる翻訳でも翻案でもなく、自分の目で見たニュージーランド、オーストラリアを書くには、そこまでする必要があると彼は考えたわけです。もちろん、彼もまだ西洋人の研究・調査に学ぶところが多いわけですが、ともかく自分の目・耳・頭で確かめてから執筆することになりました。

その結果、両国を訪れ、帰国後、郷里の大分にこもり一書をまとめ上げます。それが最初の実証的なニュージーランド文献といっていいもので、著書名は先にあげたように『濠洲及新西蘭』というぶ厚い本でした。これが日本人による独自性のあるニュージーランド研究・著作の先頭を切るものでした。

こんなことで、土屋のお蔭で早稲田大学はその関係者がニュージーランド研究の本格化への扉も開いたという栄誉を担うことになりました。

そういえば、土屋元作という人は、先ほど慶應にも関わっているということも申しあげました。彼は早

稲田関係者として取り上げるべきか、慶應の関係者として取り上げるべきか、両方に関わる側面があります。ただやはり、学校に学んでいるという点では早稲田大学の所属とした方がよいかと思います。

土屋は、たしかに慶應には同郷の福沢諭吉を尊敬していましたから、その関係でいろいろ協力し、逆に大きな仕事も慶應から頼まれてはいます。慶應は、精神的な支えとして、1899（明治32）年に〔修身要領〕という人格・精神綱領のようなものを発表します。二十数カ条からなるもので、独立自尊、自労自活という言葉・理念も入っています。この草稿をまとめたのは、実は慶應には学んでいない土屋元作なのです。学外のものがこういう基本的なものを慶應から依頼されてまとめあげ、それが慶應の修身綱領として重要な位置を占めることになるわけです。今私がここに持っている薄いパンフレットがその原本なんです。

また、慶應は創立50周年の時に、今、皆さんも頭に思い浮かべることができると思いますが、慶應のシンボルの一つである赤煉瓦の図書館、あれは創立50周年で建てたものです。そのために寄付の募金活動を行います、その発起人に土屋元作は名前を連ねています。

このように、土屋は、同郷の先輩ということで福沢諭吉を尊敬していたので、自分の学んだ学校とは関係のない慶應に大切な仕事で協力することになりました。その土屋は、早慶両校に跨りながら、ニュージーランドにも関心を持って、その研究で大きな事績を残すことになる人でもあったのでした。

## 5

ここでもう一人、早稲田大学関係者として変わり者で通っておりました安成真雄という人を取り上げてみたいと思います。安成といっても、一般の方はあまりご存知ないかと思います。もちろん朝日新聞社の人名辞典はじめ、近代人名辞典とか文芸人名辞典とかには出てくる人です。

安成真雄という人は、早稲田大学に学んだ人です。秋田では阿仁鉦山のまちで生まれていますが、中学時代から早熟で、落の臺（ふきのとう）なんていう号で俳句をつくって同人誌を出したりしていました。早稲田には、名称が早稲田大学に変わった直後に入学します。そこでは、在学中から当時の社会主義機関紙の『平民新聞』などに会い、興味をもちます。『火鞭』なんていうグループにも近づいていく。しかし、卒業後は社会主義運動のプロにはならず、新聞記者としていろいろの新聞社に関係を持ちます。

安成は変わった人で、ともかく博識で、自由人。評論家として結構厳しい見方をする人でも通っておりました。何でこんな本を知っているんだろうと丸善の内田魯庵などが驚くくらい、しょっちゅう丸善に出駆けては外国の珍しい本を注文していく。どこで買ったんだろうと思うような本を注文をする。ところが、注文の本が到着する頃はもう他に関心が移っていて、本を引き取りに来ない。それでいて、後から後から新規の注文には来る。そういう変わった人でした。

安成は、大正に入っても新聞社に属しながら社会主義運動にも歌人の弟安成二郎とともにずっと関わっていました。ただ、彼も30代で早世しておりますので、いくつか著作を残すものの、本格的に果実を生み出す前に生涯を終えるということになりました。

この安成真雄という人は、大正の初めにマオリのことを調べて書いているんです（安成真雄「『南洋の土人』のために」『黒潮』創刊号、1916年）。結構長いものです。大正の初め頃、ニュージーランドといっても残念ながら、理解できている人ばかりではない。当時はニュージーランド、さらにマオリを的確に受けとめて活字にしている人の方がむしろ例外でした。それなのに、安成は、文芸評論とか社会主義運動の方に主に関わっているのに、どこから得た知識だったのか、マオリのことをちゃんと雑誌に書いております。当時、マオリのことを自分の理解・文章でまとめているのは珍しいことなので、注意・注目してよいと思っています。

かくして、安成貞雄も、ニュージーランドに関してその受容過程の初期に貴重な足跡を標してくれた早稲田の群像の一人として忘れてはならないだろうと思っています。

要するに、これまで概観風にみただけでも、創立者の大隈重信、それから初期社会主義者・安部磯雄の理想主義的な関わり、土屋元作の本格的な著書づくりの関わり、あるいは安成貞雄の寄り道のようにマオリに興味をもった動きなど、初期ニュージーランド研究に貢献した早稲田の人たちの足跡は貴重なものでした。

以上、本日は表面に浮かぶ際立った人だけを取り上げてみました。裾野の方に目を向けると、早稲田にはもっといろいろな人がニュージーランドに関わっていると思います。一般の社会政策・社会福祉・女性問題などの研究者にもニュージーランドに触れている人がみられます。

戦前になりますが、早稲田大学出版部から『婦人問題』（宮田修著、1927年）という本が出ていますが、それを見るとよく調べていてニュージーランドの女性参政権のことが書いてあります。女性参政権は世界で最初にニュージーランドが実施しました。日本では、戦前・戦後を通して、女性参政権の歴史をテーマにした論文・著書でもニュージーランドの先駆的事績に言及しないものの方が多いくらいなのに、そういったことをきちんと書いてある本が早稲田大学出版部からも出ているということです。

そういうレベルの一般研究に目を向けると、相当多くの早稲田関係者の名前・足跡がニュージーランド研究史に登場すると思います。そういった中で際立った人が、今日取り上げた安部磯雄、土屋元作、安成貞雄らでした。彼らの貢献だけでも、どの大学もかなわないほど大きく先駆的な足跡であったといえると思います。

## 結 び

そろそろまとめに入りますが、レジュメの最後のところになります。私どもの日本ニュージーランド学会ができてから18年になりますが、その間、早稲田大学には人的にも、あるいはこういう会場など施設・設備でも、一番お世話になってきたように思っております。現在の会長も山岡道男先生、早稲田大学の教授です。

また、ニュージーランドについて、正規の学期の1学期あるいは1年間の講座として最初に取り上げたのも早稲田大学か東京大学で、多分、どちらも、ほぼ同じ頃取り組んでいると思います。私どもの学会員の多くいる山形の東北公益文科大学は、ニュージーランド講座を複数常設しました。ニュージーランド講座を正規の授業として定期的に複数持ったのは公益大学が最初ですが、単発の市民講座の中の一つや一回としてではなくて、学期や一年間通してニュージーランドに関する講座を持ったのも早稲田がトップの一つであること、さらに先にニュージーランド研究所まで創設され、このような国際研究集会まで開催いただいたことは、ニュージーランド研究史にあっては忘れられないことです。

このようなことどもでも、早稲田大学はニュージーランドに大きく関わり続けてきており、ニュージーランド研究者としては早稲田大学に感謝、あるいは敬意を表さなくてはならないと思っております。

私の今日の報告は、ささやかな概論だけですが、これから若い皆さんの手でさらに深めていただければ有り難いと考えております。今日のご静聴ありがとうございました。(拍手)

### \*総合司会：

小松先生、どうもありがとうございました。それではコメンテーターの早稲田大学国際学術院の宮崎先生、お願いいたします。

## 〔コメンテータ〕

宮崎里司

(早稲田大学国際学術院教授／早稲田大学オーストラリア研究所長)

ただいまご紹介にあずかりました早稲田大学国際学術院の教員でオーストラリア研究所の代表を務めております宮崎です。きょう山岡先生から小松先生がお話になるのでコメントをお願いしたいというご依頼がありましたので、ほんの少しかなと思いましたが、今先生が10分ほど前に終わられましたので、私のコメントが10分だなどということが初めてわかりました。ただ、それほど準備をしてくれているわけではございませんので、今、先生のお話を伺って、かつ私が今、研究所の代表をしておりますオーストラリアとさまざまな関わりなど今のお話から拝聴いたしまして勉強したことがございますので、それを含めて少しお話をしたいと思います。

予習としてどのような先生ご研究をしていらっしゃるのかなと思ひまして、『ニューージーランドノート』というもの、創刊号が2002年ということですが、先ほど先生お話しになったようにマオリの研究とか、それからニューージーランドの女性参政権のお話などもここにございまして、さまざまな分野でニューージーランドに対するご見識がおありになるのではないかなというふうに拝察いたしました。それからニューージーランドにおける労働党政権の誕生、それからそれに伴う社会保障についても先生の方から先ほど社会保障について少しご紹介がありましたが、それについてもこの『ニューージーランドノート』第6号のところでお書きになっていらっしゃるということですので、このタイトルだけですが、ぜひこの玉稿といいますか、一度読ませていただきたいなというふうに思っております。

先ほどの先生のお話、いろいろ早稲田の関係者の名前が出てきました。大隈公はじめ、私も大学に、ここに入ったときには安部磯雄、まあ安部球場というところ、今も私が勤めております国際学術院の中で日本語教育研究科というところの大学院の教員をしておりますが、そこは22号館というところでありまして、その前にある道路がグラウンド坂というところ、グラウンド坂上とグラウンド坂下というのがありまして、安部球場はちょうどグラウンド坂上、今アジア太平洋研究科のある所がグラウンド坂上というところでございますが、なぜあそこがグラウンド坂というかといいますと、まさにその安部球場があったからということでございます。

安部磯雄については私も社会主義研究会、それから協会になって、それから社会民主党になった、その中で少なからず関わりがあったということを前に少し勉強したことがありまして、この研究の中で小松先生が関わって、またご興味があるということを知ってきょう伺いました。ああ、そのような形で勉強していらっしゃる、また、ご研究が進んでいらっしゃるのかなと思って拝聴いたしました。

私が専門としているオーストラリアの研究はどのような研究かといいますと、大学を卒業してしばらくしてから、1988年にオーストラリアのメルボルンにあるモナシュ大学の日本語教育の講師としてそちらに赴任をし、それから97年までオーストラリアにおりました。オーストラリアのどこの大学だと聞かれると私はよくモナシュマフィアだと言います。まあ、マフィアというのはニューージーランドの方はおわかりのように、その大学の出身、その大学で学んできたということです。

オーストラリアというところとどんなスポーツが強いかというと、私たちはラグビーとか、クリケットとかいいますが、若干今年ラグビーが強いとはなかなか言えず、オールブラックスの活躍を見て私たちラグビーズはちょっと残念だなという思いを持って見ましたが、やはりラグビーワールドカップでオールブラックスが活躍をしているのを見ると、同じ環太平洋の中でオセアニアの、オーストラリアもそうですが、小さな国が非常によくがんばって世界の中で発信をしているということがわかり、非常に私たちもそれを

応援したものです。

そのオーストラリアとニュージーランド、さまざま共通するところがあり、私は実はニュージーランドを研究する上でオーストラリアの存在が非常に大きいかと思っております。実は私がオーストラリアに行って向こうで博士論文を書いたときは、日本語教育、また応用言語学が主な専門でしたが、海外から日本の日本語教育を見て非常に勉強になった思いがあります。それは、同じ英語圏でもアメリカを海外の英語圏から見えてきたということで、アメリカのさまざまな私のオーストラリア研究の中では言語政策を主にやっております、Language policy とか Language planning というものです。それを見ると、ニュージーランドの少数民族の扱い、つまりマオリですね。マイノリティの研究、オーストラリアもアボリジニがいますが、その研究をニュージーランドはどのような政策をもってやっているかということなどは、オーストラリアの研究をする上で非常に役に立つということでした。

最近、多様化という言葉で、さまざまな移民がヨーロッパでも入ってきておりますが、ご存知のようにドイツのメルケル首相は、ドイツがさまざまな移民をこれまで受け入れてきたのは必ずしも成功とは言えない。つまり、多様性というのは結束性を危ぶませてきたということをいろんなところで発言をしているようですが、オーストラリアもニュージーランドも移民国家として、また、マイノリティを抱える国家としてこれからどのような形で進むのかということは、この日本からもいろいろ学ぶところが多いのではないかとということで、日本から見れば、私は個人的にオーストラリアに行って、ニュージーランドとオーストラリアが地図の上方にある、つまり upside down world map というものを見て、世界観が少なからず揺さぶられたことがあります。そのニュージーランドもオーストラリアも今世界の中では非常に発言権が増してきています。小さな国であるからこそ、つまりこれからの地域研究は大国ではなくて、そうではない国の研究をすることによってポストモダンの研究を進めるという、そういったようなものがあるかと思いますが、1990年代、フランスが太平洋のビキニ環礁のあたりで核実験をしたことがあります。その時にニュージーランドもオーストラリアも首相の談話として非常にその行為を批判し、それほど核実験をしたかったらパリの郊外ですればいいというようなことを相手の首相に、また大統領にものを言ったということがありまして、そのような小さな国、またはアメリカなどと比べて発言権の小さい国がどのようにこれから世界の中で存在を示していくかということが、このニュージーランド研究、また私が今やっているオーストラリアの研究が役に立ってくるかなというふうに思っております。

今、オーストラリアの首相は、ジュリア・ギラードという首相で、先ほどのAPECの時にも女性の首相として発言をしておりましたが、これから私もニュージーランドの研究を通してオーストラリアの研究をさらに深めていきたいと思っております。そのような思いを新たにされた小松先生のご報告であったかと思いません。

以上でコメントを終わらせていただきますが、何かございましたらニュージーランド研究所と同様、早稲田のオーストラリア研究所にもご関心をもっていただければと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

**\* 総合司会 :**

宮崎先生、どうもありがとうございました。以上をもちまして小松先生のご報告とコメンテーターの宮崎先生のお話を終わります。これから10分間コーヒータイトといたしまして、最後に第3報告をお聞きすることになります。その後とてもすばらしい歌声の古橋先生をお招きしておりますので、アメージンググレイスを皆さんと一緒に歌い、また、その後で懇親会も予定しておりますので、もうしばらくご一緒にさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 〔 質 疑 応 答 〕

\* 総合司会 :

それでは第3報告に入りたいと思いますが、これまでに質問が1枚だけ出ました。それは先ほどの小松先生のお話についての質問です。先生の方からお答えをいただけるとのことですので、ちょっとお時間をください。

小松：それでは時間もないと思いますので、簡単にご説明させていただきます。私自身、何でニュージーランドに興味、魅力を感じたのかという質問でございます。私は30年前に初めてニュージーランドに行ったのですが、その時は前々からどうしてもニュージーランドに一度行きたいという夢を持っていました。それは、一つには安部磯雄先生が憧れたのがニュージーランドであったこと、あるいは戦前大正デモクラシー下に民衆本位の社会事業・社会福祉を訴え、戦後は日本女子大教授をされていた生江孝之先生も憧れていたのがニュージーランドであったことからです。

生江は、戦前は内務省とかいろいろなことに関わっていますが、彼が大正期を通じて憧れていたのがニュージーランドでした。生江がそのニュージーランド行きを実現できたのは1925年になってからです。帰国後、世界恐慌の直前に『新らしき国新西蘭と濠洲』（新生社）という本を書きますが、そこにニュージーランドへの自分の理想・憧れは現地に行っても崩れなかった。やっぱりニュージーランドはすばらしい国だったという風に書いております。

そういうのを見て、ニュージーランドという国は、日本ではよく知られてないけれども、女性参政権だけでなく、いろいろな面で世界の先頭を走ってきたのだと教えられました。私のやっている社会政策でも、3つの柱、皆さんはまさかと思うでしょうが、全部ニュージーランドが世界で最初なんです。社会政策の大柱はイギリス、ドイツが先行しました。その中の8時間労働制、最低賃金制、あるいは労使の強制的仲裁制度に関しては世界で最初の実施国はニュージーランドです。労働省などの最低賃金の本を見ても、必ず最低賃金制の世界で最初はニュージーランドと書いてあります。義務教育の無償制も最初はニュージーランドです。あるいは社会保障制度でも、世界で最初の法制化はアメリカですが、総合的で内容がしっかりしたものという点では、世界の最初はニュージーランドです。戦後、世界中の社会保障のバイブルになったイギリスのベヴァリッジ報告書、その中でベヴァリッジが唯一取り上げた国はニュージーランドです。

そういうことで、ニュージーランドは、日本ではあまり関心を持たれていませんが、社会的な諸制度では先を行った国であるということで、若い頃から憧れていました。その結果が研究面での取り組みであります。

\* 総合司会 :

ありがとうございました。(拍手)